

Arakawa City  
Art Culture Promotion Foundation公益財団法人  
荒川区芸術文化振興財団

▶ リンク集

文字サイズ

小

中

大

トップ &gt; 荒川の人 &gt; No.41

## No.41 三遊亭 好楽(さんゆうてい こうらく)

## 寄席に熱中した高校時代

## 楽しい荒川のマンション長屋

日本テレビ日曜夕方の「笑点」の大喜利メンバーとしておなじみの顔。得意即妙のやりとりで、みんなを楽しませてくれています。

両国永谷ホールでの「両国寄席」出演中、楽屋で話を伺いました。

一笑出演はいつからですか。

昭和五十四年から四年間、それに六十二年から今日までずっと。最初は水色の着物、今は、あのはでなピンクの着物、とても高座では着れませんが、カラーテレビ向けなんです。もっともあれはテレビ局の備品ですが。

林家正蔵に弟子入りしたのですか。

ええ、四十一年、高校（文京区京華商業）卒業の翌年でした。林家九蔵の名で四十六年二つ目、五十六年真打ちになりました。

いまは円楽門下。

五十七年に正蔵（彦六）が亡くなり、円楽門下にはいり、三遊亭好楽となりました。

子供のころはどうでした。

大塚に住んでいました。八人兄弟の六番目。警察官だった父が六つの時に亡くなり、母親一人で切り盛り。おかずなんか、ちょっと油断していると、自分の分がなくなる。兄弟ゲンガが始まる。一つ五円のコロッケをよく買って来たものです。ラジオの落語が面白くて、小学校の時から、寝ながら一人でくすぐり楽しんでました。映画もよく見たし、聞くもの見るもの何でも好きでした。それにスポーツ。中学時代はバスケット、高校でバレーボール。野球はずっと。

一嗤家（はなしか）になろうとおもったのは。

友だちが、寄席に行こうというので、ついて行ったのがやみつきになり、以来一人で池袋の寄席通い。いつも、一番前にすわっているので、覚えられてしまって。円楽の弟子になってやろうと思っていた時、今の風楽が一番弟子として入門したという新聞記事を見て、先を越された、と残念がったものです。そこへあるとき、ラジオから正蔵の人情咄が流れてきて、その声がすごく新鮮に聞こえ、私の師匠はこの人、と決めたのです。

一大塚からどちらへ？

所帯を持ってから、新宿、杉並など五つの区を転々と引っ越しました。引っ越し度に隣近所にそばなど配るのですが、「それナニ！」などと言われて、困ってしまったこともありました。東京には昔の人情味がなくなったのですかね。

一それから荒川に住むようになった。

荒川は、昔から嗤家がよく住んでいましたので、ぜひ住んでみたいと、念願の地だったのです。西日暮里三丁目の富士見マンション、最上階の五階で、3LDK。今年九年目になります。冬なんか本当に富士山がよく見えるのです。広重の絵そっくりの。まだローンは残っていますが。

荒川はとても住みやすく、人情のあつのがうれしい。それでも私は"よそ者"なので、隣近所との付き合いには、できるだけつとめてきました。マンションには、弁護士先生なども住んでいるのですが、いまは、朝のあいさつから始まって、人間同士の波長がすっかり合っています。お祭りのときなんか、ドアは開けっ放し。くつやげたがずらっと並び、はみだすほど。にぎやかなものです。いうなれば「マンション長屋」です。そんなつながりを大切にしていきたいと思っています。

高座に上がるだけで、和気あいあいとした雰囲気になる好楽師匠。なかでも、人情咄に味わいのある芸風にいっそうみがきがかかっています。高座でも、テレビでも、マンションでも、その名のお通り、みんなに好かれる四十五歳です。

読売新聞編集委員・平田明隆

カメラ・水谷昭士

